

Title	日本語における同一動詞反復構文の分析：「走りに走る」，「走るには走る」，「走るに走れない」：動詞活用形と助詞「に」の機能からの説明の試み
Sub Title	Etude de trois types de construction à répétition verbale en japonais
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Ito, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.40 (2025.) ,p.43- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20250630-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本語における同一動詞反復構文の分析： 「走りに走る」，「走るには走る」， 「走るに走れない」

——動詞活用形と助詞「に」の機能からの説明の試み——

芦野文武*／伊藤達也**

1. 導入

本稿では、助詞「に」を介して同一の動詞が反復する次のような3つのタイプの構文を扱う⁽¹⁾：

- (A) 太郎は走りに走った。
- (B) 太郎は走るには走った。
- (C) 太郎は走るに（も）走れない。

『明鏡国語辞典』（以下『明鏡』）はそれぞれのタイプについて次の記述を行っている：

- (A) 「〈動詞連用形に付き、同じ動詞を続けて〉意味を強める」
- (B) 「〈「A するには A するが」の形で、同じ動詞を繰り返して〉譲歩の

* 慶應義塾大学文学部仏文学専攻

** 名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科

(1) 助詞を介さずに同一の動詞が反復する構文（cf. 「泣く泣く諦めた」）は今回は扱わない。

気持ちを表す」

(C)「〈動詞連体形に付き、同じ動詞の可能打消しの形を続けて〉…したくともできない意を表す」。

以下、これらの構文をそれぞれ「タイプ A」, 「タイプ B」, 「タイプ C」と呼ぶ。

本稿はこれらの3つのタイプの構文を含む発話文の意味がどのように構築されているかを明らかにすることを目的とする⁽²⁾。

2. 理論的枠組みと方法論

本稿が分析の対象とする同一動詞反復構文に関しては、すでにいくつかの先行研究がある (cf. Okamoto (1990; 1994), 国広 (1997), 野呂 (2009; 2016⁽³⁾), グループ・ジャマシイ (2023))。

先行研究の理論的立場には動詞の反復が「類像性」(iconicity) の効果をもたらすとする立場 (cf. Okamoto; 野呂) と、構成要素からは表現の意味が予想できず、「構文自体が持つ意味」を認める「構文文法」の立場 (cf. 野呂) がある。

本稿は、両者のアプローチとは異なり、A～Cのタイプの同一動詞反復構文は、たとえ発話文を構成する個々の語彙・文法要素からは予想できない意味が現れるように思われる場合であっても、それらがマークする心的操作を再構築することで、発話文の意味の構築が説明可能であるという

(2) 「意味が構築される」とは、「意味は与えられたものではなく、発話を通じて構築される」とする構築主義 (constructivism) の考え方である (cf. Franckel 2002)。

(3) Okamoto (1994: 402, Note 3) は、反復 (repetition) と畳語 (reduplication) を区別し、畳語が厳密な同一形式の繰り返しに限定されるのに対し、反復はあらゆる形式の繰り返しをも含む広い意味で使用している。本論もこの区別に従い、「反復構文」を、活用形の違いを含みながら同じ動詞が2度生起する構文という意味で使用する。他方、野呂 (2009) は「動詞連用形重複構文」, 「名詞反復構文」を併用するが、野呂 (2016) では「反復構文」という名前に統一されている。

発話意味論の立場を採用する⁽⁴⁾。

以下、3つのタイプの構文の重要な構成要素、すなわちタイプAに現れる動詞の連用形（「走りに走る」）、タイプBとCに現れる動詞の連体形（「走るには走った」／「走るに走れない」）、および3つのタイプに共通して現れる助詞の「に」について簡単に記述する。

まず、本稿では動詞の連用形は概念（Notion）をマークする形式であると考え（cf. Dhorne 2005）⁽⁵⁾。ここで言う「概念」とは、認知的な性質を持ち、名詞や動詞という品詞に先行する、我々が言語を使う際に浸っている文化の中で共有されている「文化・物理的特性の束（*faisceau de propriétés physico-culturelles*）」のことであり、言語化に先立つ表象（*représentation*）である（cf. Culioli）。例えば「本」の概念は、／本であること／という質的特性として表される。この概念から作られる概念領域は段階性を備え、典型的な「本」から、本と呼ばれうる周縁的な「本」（パンフレット、絵本等）を経て、外部「本でないもの」へと連続している。

動詞の連用形がこのようにVの「概念」を表すのに対して、連体形は動詞の概念の「出現事例」（Occurrence）をマークする形式と考える（cf. Suto 2010）。発話意味論における出現事例とは、概念が個別的に現実化した、時空間に定位される出来事のことを言う（この出来事は概念の事例であり、事例と概念との間には適合性の関係がある）。

最後に、助詞「に」の機能について簡単に述べておく。伊藤・芦野（2022）では、「XにY」（Xは「に」に先立つターム、Yは述部）という形式において、「に」はXをYの成立の「基準」（*repère*）として規定す

(4) 発話意味論では、発話文ないし発話文の要素の意味は、発話文を構成する語彙の表面的な形式からではなく、それがマーカーとなっている心的操作（*opérations mentales*）から構築されていると考える。これらの議論に関しては主に Culioli（1990；1999）を参照。

(5) 別の言葉では intension「内包」をマークする形式とも言える。なお、発話意味論においては、概念の研究は名詞領域から開始されたが、本稿では動詞領域への拡張の可能性において論じている。

るという仮説を提案し、助詞「に」が関係づける X と Y との関係性には 3 つのケースが区別できることを示した。本稿が分析する反復構文で現れる「に」は、このうち「限定」のケースにあたると考える⁽⁶⁾。つまり、「基準」にあたる限定項 X が、被限定項 Y を限定する、すなわち、Y に来る動詞で表される事態の実現の仕方を特定化するという関係である⁽⁷⁾。

以上を踏まえると、3 つのタイプの同一動詞反復構文のそれぞれの意味価値は、いずれの場合も、X に置かれる V が、Y に置かれる V を限定するという心的操作から構築されていると予想できる。つまり、ある V を、同じ動詞の連用形を使って限定する場合と、連体形を使って限定する場合では、構築される意味が異なるということである。このように考えることで、3 つの動詞反復構文を統一的に説明することを試みる。以下タイプ A ～ C を順に分析する。

3. タイプ A の分析

3.1. タイプ A の意味構築のメカニズム

既に見たように、次のような発話文に見られるタイプ A の構文では、X の位置に動詞の連用形が来ることが特徴である。

- (1) 母親は代わってあげられればと泣きに泣いた。(山本文緒『プラナリア』, p.29, 文春文庫, 野呂2016: 45)

(6) 伊藤・芦野(2022)では、X が Y を「限定」するケース(「必死に走る」)のほかに、X が Y の成立の「起源」となるケース(「地震に驚く」)、X が Y の成立を「補完」するケース(「名古屋に行く」)を区別している。

(7) それは、冒頭に挙げた 3 つの例文において、A, B のケースでは Y (「走った」)の実現の仕方が、X (それぞれ「走り」と「走る」)によって限定され、C のケースでは、Y (「走れない」)の実現の仕方が、X (「走る」)によって限定されるという意味である。つまりは、Y「走った／走れない」で表される事態が、X を参照する形で実現するということである。

このタイプ A の構文の意味について、先行研究では、「動詞の強調形。長時間続いたり烈しい動きであることを表す」(国広1997: 281), 「同じ動詞を繰り返す, そこで述べられる動作や作用の程度が非常に激しいことを強調する」(グループ・ジャマシイ2023: 372), 「長時間・期間にわたって事態 V が継続した結果, 程度・量が極端である」(野呂2016: 147) などの記述が提案されている⁽⁸⁾。また Okamoto (1994) は, この構文が “to the utmost extent” (最大限に) という意味を表すとしている。

これらの先行研究の記述に共通する「高い程度において V する」「極限(限界)まで V する」という「強調」の意味は, 本稿では, ある V の出現事例 (Y) が, V が表す可能性の全て(「極限まで」を含む)の「概念」(X)によって限定されることによって構築されると考える。つまり, 「X に Y」という形式において, X に V の連用形が来る場合, X に相当する「概念」が, 基準としての限定項として機能し (cf. 「に」の仮説), それが Y に相当する「出現事例」(被限定項)を限定する関係が成立すると考えるわけである。この場合, X による Y の「限定」とは, V の出現事例 (Y) が V の概念 (X) を参照し, それに適合する形で実現するということであると考える。結果として, V の概念に (十全に) 適合する V の出現事例が構築されるために, V の高い程度における実現(「極限まで V をする・V である」)の意味価値が生ずると考える。以上がタイプ A の構文によって表される意味の構築のメカニズムについての仮説である。

このように構築される「限界」という意味価値について, 以下, 動詞の意味と文脈によって, いくつかのケースを区別することを試みる。

(8) 「ひた走りに走った」も同一の形式だが, 「ひた走り」は名詞である。ゆえに「まっすぐに走った」「後ろ向きに走った」と同じように「走った」の様態を, X「ひた走り」「まっすぐ」「後ろ向き」が限定しているケースと考えるため, 本稿のタイプ A からは除外される。

3.2. タイプ A のヴァリエーション

3.2.1. 質的限界

以下の例文では、V の出現事例 (Y) は V の概念 (X) の質的中心に適合するという仮説を立てる。それは、動詞によって表される状態が、ある時点で、これ以上望み得ないほどの高い質的レベルに達するということであり、「最高に V である」と言い換えることができる。

(2) 会場はノリに乗っていた⁽⁹⁾。

(3) とはいうものの、首相・安倍晋三はつきについている。本人も 2 月 27 日、一時的にねじれが解消して補正予算が成立したことに触れ、「安倍さんは運がいいと言われるが、運も実力のうちですから」と述べているとおりで。やることすべてが「怖いようにうまくいく」(官邸筋)という状態だ。

(<http://ceac.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=2109>)

3.2.2. 量的限界

以下の例文は、V の出現が量的な限界に適合するケースにあたると考えられる。結果として、「最大限に」「これ以上は不可能なほどに」という解釈が生ずる⁽¹⁰⁾。

(4) 中国当局との調整などで撮影日程が延びに延びた。

(9) 以下、出典がない例はすべて筆者らによる作例である。

(10) V の「反復」は直感的に V の複数の生起という解釈に結びつきやすい。例えば、「寿司を食べに食べた」と言う場合、一見、「複数回食べた」の意味で解釈されやすいが、実際には「食べた」のは一度だけであり、その一度だけの動詞の生起において、「食べられなくなるまでたくさん食べた」と解釈するのが自然である。述部の「食べた」が「に」を介して「食べ」(連用形)によって限定されていることから、「(質と量の) 限界まで」食べると言う意味が構築されている。

(https://note.com/chic_puma3131/n/ne2208b0db7d2)

- (5) コロナの後遺症で抜けに抜けた髪がまた生えてきた。

(https://x.com/banso_tabiusagi/status/1899388264072798575)

(一部変更)

(4) の動詞「延びる」はここでは「延期される」という、主体の意志によってはコントロールできない出来事を意味する。この例文では、出来事の反復的な解釈「何度も延長された」も排除できないが、文脈上の意味は「これ以上延ばせない限界まで延びた」という量的限界までの長大化の解釈となる。量的限界には解釈上、活動の反復とプロセスの長大化が含まれうる。

(5) の「抜ける」も話者の意図が関わらない出来事であり、「髪が抜ける」ことが最大限、反復的に、限界まで（これ以上抜けることが不可能なほどに）発生したことを表している。

3.2.3. 質と量、両方の限界

以下の例では、V の出現が、質と量の両面の限界に達するケースと考えられる。程度の質的な甚だしさとプロセスの限界までの反復および長大化という解釈が生じる。

- (6) 私は、さっきから待ちに待っていたこの機会をすばやく捕えるが早いかな、私の用件を切り出したのである。

(堀辰雄『窓』, 青空文庫, 野呂2009: 50)

動詞「待つ」は、「何かの到来を期待しながら時間を過ごす」(『明鏡』)ことを意味する。したがって、「待つ」は一方では「到来を期待する」、他方では「時間を過ごす」ことを意味するため、この構文においては、期待が最大限にまで高められ、過ごされる時間も最大限にまで引き伸ばされる

ような実現をした，という解釈が生ずる。

4. タイプ B の分析

4.1. タイプ B の意味構築のメカニズム

次のような発話文に見られるタイプ B の構文では，タイプ A とは異なり，X の位置に動詞の連体形が来ること，また「に」の後に，常にとりたて助詞「は」を伴うことが特徴である⁽¹¹⁾。

(7) 「会いに来てくれますか?」「行くには行くが遅くなるよ。」

(国広1997 : 281)

このようなタイプ B の構文の意味について，国広 (1997 : 281) は「動きが最低限に実現することを認める」，グループ・ジャマシイ (2023 : 396) は「同じ動詞を繰り返し用いて，「一応はそうする (そうした) けれども」という意味を表す。後ろには，「満足のいく結果になるかどうかかわからない」という意味の表現が続く」，野呂 (2016 : 190) は「期待された事態の少なくとも 1 つを伴わず，事態 V が生じる」と記述している。

上記の記述が示すように，タイプ B 構文には，「一応は V」，「とりあえずは V」によって注釈できるような，いわば，動詞で表される行為の「不完全な実現」・「十全ではない実現」という意味が観察できる。

このタイプ B の構文の解釈については，構成要素の意味から表現全体の意味が予測できない「構文」に結びついた意味として考える立場もある (cf. 野呂 2016 : 184) が，本稿では，助詞「に」が担う「X による Y の限定」という観点から，タイプ B に関しても，タイプ A の場合と同じように，構成要素から表現全体の意味の構築が説明できると考える。つまり，この

(11) 助詞「に」を伴わない「V ことは V」(cf. 「作文を書いたことは書いた」) という構文も類似した意味を持つ (cf. Okamoto 1990, 野呂 2006) が，この構文と「V には V」の比較分析は別稿に譲りたい。

場合も、Xに相当する動詞が限定項となり、被限定項であるYにある動詞の出現事例を限定することから意味が構築されると考えるが、上述のように、タイプBでは、Xにあたる動詞は連体形であることがタイプAとは異なる点である。

既に見たように、動詞の連体形を動詞で表される行為の出現事例を表すと考え、タイプBの構文では、出現事例Yの実現の仕方が、同じく出現事例として捉えられたXを参照することで限定されることになる。とりたて助詞「は」の機能も併せて考えると、タイプBの構文は「ある行為が事例として出現したか否かに関しては（「Xには」）、（確かに）実現した（Y）」と記述できるだろう。

このように、タイプBの構文では、Yによって表される事例が出現すること自体に焦点が当てられ、ある動詞の事例に関して、「最低限の実現（どのような方法であれ事例の出現が時間軸上に定位されること）」が確認されるということのみが問題になる。さきほど観察した、行為の「不完全な実現」・「十全ではない実現」という解釈はここから生ずると考えられる。

この「最低限の事例の出現」（cf. 国広 1997）というYの性質は文脈によって異なる解釈を受けうる。以下3つのケースを区別する。

4.2. タイプBのヴァリエーション

4.2.1. Vの非実現の可能性の否定

(8) 大会当日の体調は最悪だったが、走るには走った。

(9) 私の子供は嫌いなものでも食べるには食べる。

これらの例では、動詞「走る」「食べる」によって表される行為の事例の出現（＝行為の実現）に関しては（cf. 「Xには」）、それが確かに実現した（Y）ことが言われている。同時に、文脈により、この行為の実現が、ア・プリオリにはそれを妨げるような状況で生じたことがわかる（cf. 「体

調が最悪なこと」「嫌いなものがあること」)。したがって、ここでは「走る」「食べる」という行為の「最低限の実現」とは、行為の非実現の可能性を否定して実現されたことであると解釈できる。言い換えれば、「Vしない」／「Vできない」という予想に反してVで表される行為が（確かに）生じたということである。

4.2.2. Vへの期待・予想を欠いた事例の出現

- (10) 今日の試合は負けるには負けたが、あまりみっともない負け方ではなかった。 (野呂 2016 : 185)
- (11) 体調が悪く、お正月料理は、食べるには食べたが、美味しく食べられなかった。

これらの例でも、動詞「負ける」「食べる」によって表される行為の事例の出現（＝実現）に関しては（cf. 「Xには」），それが確かに実現した（Y）ことが言われている。4.2.1.と異なるのは、この場合、Yにある動詞の事例が、その非実現の可能性を否定する形で出現するのではなく、Yの出現に一般に期待される／予想される様態（「惨めに負ける」「おいしく食べる」）を欠いて出現したということである。つまりこの場合、Yの事例の最低限の出現とは、それに関連する質的限定を伴わない、いわば形式だけの出現という解釈ができる。

4.2.3. Vに関連付けられる目的を欠いた事例の出現

この最後のケースでは、Yの事例の最低限の出現とは、それに伴う目的が達成されない形での出現と考えることができる。

- (12) 読むには読んだが、よく理解できない。 (『明鏡』)
- (13) 山田さんと会うには会ったが、ほとんど話ができなかった。

(野呂2016: 185)

(12) では、「読む」の事例の出現は、ア・プリオリにはそれ自体の目的として「理解する (こと)」を含んでいると考えられるが、Y (「読んだ」) が最低限の出現と捉えられるため、「理解する」という目的の達成とは切り離された形で、単に「読む」という行為が形式的に生じたということが言われている。(13) についても同様の説明が可能である。ただし (12) とは異なり、「話しをする」という目的は「会う」という動詞自体に含まれているのではなく、状況的に導入されていると考えることができる。

5. タイプ C の分析

5.1. タイプ C の意味構築のメカニズム

既に見たように、次のような発話文に見られるタイプ C の構文では、X が動詞の連体形¹²⁾である点はタイプ B と同じだが、Y が動詞の可能形 + 否定形であることが B とは異なる¹³⁾。

(14) 足が痛くて走るに走れない。

この形式を踏まえると、タイプ C の構文の意味構築のメカニズムは、「動詞が表す行為の事例の構築が企図されるが (cf. 「X に (も)」)」, そのよ

(12) このタイプ C の構文では、次の例文のように、X にしばしば動詞の意向形が来ることが知られている: 「走ろうにも走れない」。

(13) 「に」の後にしばしば「逆接」を表す接続助詞「も」が付加される点もこの構文の特徴であるが、筆者らは「も」の仮説をまだ持ち合わせないため、本稿ではこの助詞がない形式のみ扱う。「も」は、X に意向形が来る場合は必須となり (「歩こうにも歩けない」vs 「*歩こうに歩けない」), それ以外の場合は必須でない (「歩くにも歩けない」vs 「歩くに歩けない」) が、これは、前者においては、一方で話者が行為を遂行しようとする意志と、他方でそれが遂行できないという2つの観点の対立がより明確になるためであると考えことは不可能ではない。

うな出現事例は構築できない（Y）（cf. 可能形の否定）」と記述できる。タイプCの構文は、一方で、話者が動詞の事例を構築しようとするが、他方で何らかの事情がその構築を妨げるという文脈で現れる。

5.2. タイプCのヴァリエーション

動詞が表す行為の事例の構築がどのような理由で妨げられるかという観点から、少なくとも以下の2つのケースが区別できる。

5.2.1. 程度の高さ

(15) 人があまりに多すぎて、歩くに歩けない。

(16) 泣くに泣けない凡ミス (『デジタル大辞泉』)

(15) において、「歩くに歩けない」は、「人が多すぎる」という状況が、動詞「歩く」によって表される行為の事例の1つも生起させることができないことを意味する。「歩く」は実現されず、主体の意図にとどまる。

(16) の「泣くに泣けない」は慣用表現であり、辞書においては「泣きたくても泣けないほど無念で悔しい様子」（『ことわざ辞典 online』）、「泣いたくらいではどうにもならないほどひどく辛い」（『デジタル大辞泉』）という定義が与えられている。この例文では、「（凡ミスの悔しさを表現するのに）泣いたくらいでは不十分」である気持ちが表現されている。一般に「悔しさ」は「泣く」を引き起こしうるが、ここでは、悔しさの度合いがあまりに高すぎて、普通の後悔ならば引き起こされうる「泣く」の1つの事例さえ構築できないという意味である。

5.2.2. 複合的な状況

- (17) 今日、会社で朝のミーティング中に上司が話しているとき、上司の頭に虫が止まってるのを見つけてさ。それがすごくおかしかったんだけど、上司が真剣な顔で話しているから、笑うに笑えなくて、困ったよ。 (<https://ja.hinative.com/questions/20076087>)

「笑うに笑えない」も慣用的表現であり、『実用日本語表現辞典』（オンライン版）は、「笑おうとしても笑うことができない、といった意味で、滑稽ではあるが深刻な問題でもある、ばかばかしいことだが由々しき事態である、などの意味合いで用いられる表現」としている。この記述からも分かるように、ある状況が「笑う」を惹起するような特性を持っていると同時に、それとは反対の特性も持っているために、「笑う」ことが憚られるような状況でもあるという複合的な状況が問題になっている。

例文でも、「上司の頭に虫が止まっている」という状況はア・プリオリには「笑う」の事例の構築に向かうが、「上司が真剣な顔で話している」という状況により、そのような事例の構築ができないことがこの慣用表現によって表されている。

6. 結語

本稿は日本語の3つのタイプの同一動詞反復構文を取り上げ、それぞれのタイプの構文の意味の構築のメカニズムを、助詞「に」および動詞の活用形などの、当該構文の構成要素の役割を考慮に入れながら明らかにしようとした。

3つの同一動詞反復構文は全て、格助詞「に」を介して、同じ動詞(V)が「に」の左と右に出現する(「XにY」)という共通点を持つ。本稿では助詞「に」はXに、Yによって表される事態の成立の「基準」というステータスを与え、それによってYを限定するという仮説(伊藤・

芦野2022) から出発した。その際、同じ V が X 位置で連用形になる場合 (タイプ A) と、連体形になる場合 (タイプ B, タイプ C) が区別でき、活用形の違いが、Y 位置に来る動詞の限定に差異を与えることを示した。

最後に3つのタイプの構文における意味構築のメカニズムを要約する：

タイプ A (「走りに走る」) は、X 位置の V が連用形の形をとり、V が概念 (表象) として Y を限定するタイプである。構築される意味は「限界までの V」であり、量的限界、質的限界、量／質の両方の限界を区別した。

タイプ B (「走るには走る」) では、X 位置で V が連体形に置かれ、V の事例構築が Y を限定するタイプである。構築される意味は「V (Y) の最低限の実現」であり、それは「V の、内容を伴わない形式的な実現」と言い換えることもできる。このような V (Y) の事例構築は、事例構築の不在を否定する形での事例の出現、予想・期待される質的限定を伴わない形での事例の出現、事例構築に関連する目的性と切り離される形での事例の出現など、文脈により様々な解釈を受けうることを示した。

タイプ C (「走るに走れない」) は、X 位置で V が連体形に置かれ、且つ、Y 位置で V が可能形 + 否定形に置かれるタイプである。構築される意味は、「V (Y) の事例の1つも構築できない」である。このタイプの構文は、文脈に V の実現をブロックする障害物が存在しており、何がその実現を妨げるかによって2つのケースを区別した。

参考文献

- Culioli, A. (1990): *Pour une linguistique de l'énonciation*, tome 1, Ophrys.
 Culioli, A. (1999): *Pour une linguistique de l'énonciation*, tome 2, Ophrys.
 Dhorne, F. (2005): *Aspect et temps en japonais*, Ophrys.
 Franckel, J.-J. (2002): « Introduction : le lexique, entre identité et variation », *Langue française*, 133, pp. 3-15.
 Martin, S. E. (1975): *A Reference Grammar of Japanese*, Tuttle.
 Okamoto, S. (1990): « Reduplicated Verbs in Japanese as Grammatical Constructions », *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 16 (1): pp.

248-256.

Okamoto, S. (1994): « Augmentative verbal repetitive constructions in Japanese », *Cognitive Linguistics*, 5-4, pp. 381-404.

Suto, Y. (2010): « Contingent et nécessaire? Analyse de l'emploi inter-propositionnel de la particule japonaise *to* », *Faits de langues, Les Cahiers N°2*, pp. 139-159.

伊藤達也・芦野文武 (2022): 「現代日本語における格助詞「に」の発話意味論的記述」『名古屋外国語大学論集』10, pp. 117-143.

北原保雄 (編) (2021): 『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店.

国広哲弥 (1997): 『理想の国語辞典』大修館書店.

グループ・ジャマシイ (編) (2023): 『日本語文型辞典・改訂版』くろしお出版.

野呂健一 (2009): 「現代日本語の同一動詞反復表現「VにV」について」『言葉と文化』10, pp. 45-58.

野呂健一 (2016): 『現代日本語反復構文一構文文法と類像性の観点から』くろしお出版.